

# 2011年度会員総会開催 手を携え、社会的課題に立ち向かう

2011年度熊本YMCA会員総会が、5月27日(金)に中央YMCAで開催されました。150名が出席のもと、「共に生きる社会づくり3カ年計画」の初年度として取り組んだ2010年度の活動を振り返るとともに、支え合う社会づくりへ向け歩み続けることを確認しました。

総合司会を健康教育部リーダーの児玉一薫さんと柏山弘明さんが務め、進行されました。第一部礼拝では、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団川尻キリスト教会牧師の高口喜美男さんが「熊本YMCAの心意気」と題し、奨励されました(詳細は3面)。

続く第二部では、YMCAの活動を支えるユー・スポンテニアを代表し、司会も務める児玉一薫さんに委嘱状が渡されました。その後、10年、20年、30年、40年にわたり、熊本YMCAの活動を支える会員の方々へ感謝状と記念品が授与されました。40年在籍の上田博仁さんは表彰者を代表し、「生涯ボランティアとしてYMCAの活動を支えていきたい」と述べられました。また、熊本ワイズメンズ



クラブが取り組む、30周年を迎えた「日韓視覚障がい青少年交流プログラム」に対し、特別表彰が贈られました。

さらに、2012年に設立60周年を迎える阿蘇YMCAのアピールや会員活動「赤いりんごの会」の報告(詳細は1面)、東日本大震災で被災した地域を視察した職員による報告などがありました。

第三部総会は、会長の吉本貞一郎さんが議長を務め、行われました。2010年度事業報告では、スクリーンに映し出された数々の写真と、ミュージカルY!で活躍する中原幸恵さん・橋本知佳さんのナレーションによって、一年間の活動が振り返られました。

2011年度全体運営方針(案)については、総主事の堤弘雄さんより、地球市民の育成、ファン・ド・レイジング(※)委員会の設置、子育て支援事業や発達障がい支援事業の強化などを提案。ほか、決算報告や監査報告、2011年度予算案など各議案についても審議され、いずれも承認されました。 ※ファン・ド・レイジング: 寄付集めやそのための活動のこと

# 東日本大震災 被災地復興のため心をつなぐ支援を

東日本大震災の発生から2カ月以上が経過しました。未だに12万近い人々が避難所生活を強いられ、復興は長期化の様相を深めています。

熊本YMCAでは、震災後に街頭募金活動を実施。その後も広く募金を呼びかけ、4月30日までに430万円を超える支援が集まりました。また、熊本YMCAからの今後の支援方法を探るため、5月9日(月)～15日(日)、寺岡良男さんと木村成寿さんの職員2名が被災地を訪れました。



11日(水)に訪れたのは、宮城県東松島市の野蒜(のびろ)小学校。校舎は被災したため、学校が再開された鳴瀬総合支所の教室で、むさしYMCAの子どもたちが準備した「絆のメッセージ」が1年生へ届けられました。仙台YMCAは、避難所生活を送る野蒜小の子ども



つ絆や規範意識は、被災地を支える力になるはず。また、危機管理は99%が無駄であると考えておくことが基本です」と話されました。来場者は熱心に耳を傾け、隊員のメンタルケアなどについて質問。支援活動への理解を深める機会になりました。

もたちを励まそうと、レクリエーションの機会を提供してきました。

13日(金)は、岩手県宮古市の盛岡YMCA宮古ボランティアセンターを訪ね、寺岡さんと木村さんは、浸水により泥に埋もれた高齢者の自宅で、他県から来たボランティアらとともに、土砂や瓦礫を取り除く作業を手伝いました。

東日本大震災がもたらした甚大な被害と、原発の問題が重なり、復興の道のは険しいものです。震災と津波により大きなショックを受けた子どもたちへの、レクリエーションなどを通じた心のケアの必要性。5月初旬にピークだった、ボランティアが不足するなど、今回の視察で見えてきた課題。地元との信頼関係を土台にした高齢者や子どもへの支援の有り様を検討し、熊本YMCAでも長期的視野に立つて支援に取り組んでいきます。

## 東日本大震災YMCA救援・復興募金(2011.4.30)

4,347,370円の募金が集まりました。

なお、現地復興には長期支援が必要なため、受付期間を9月30日まで延長しました。

引き続き、皆様のご協力をお願いいたします。

## 東日本大震災支援 緊急報告会 絆や規範意識が被災地を支える

5月7日(土)、上通YMCAで「東日本大震災支援 緊急報告会」が開催され、熊本県警察本部警備部長の吉村郁也さんが、支援活動の報告とともに危機管理のあり方を提言。県警では、今回宮城・福島・岩手へ約400名を派遣。被災地の写真を紹介しながら、「危険な状況が続く中、隊員たちは熊本県民代表という意識で活動しています。日本人が潜在的に持



つ絆や規範意識は、被災地を支える力になるはず。また、危機管理は99%が無駄であると考えておくことが基本です」と話されました。来場者は熱心に耳を傾け、隊員のメンタルケアなどについて質問。支援活動への理解を深める機会になりました。